子どもたちの未来を開く 桶川の子育てと居場所づくり

桶川市は、11月3日で市制施行55周年を迎えた。幅広く取り組む施策の中でも特に力を入れているのが子育て支援だ。こども計画の方針は「こどもがのびのびと個性豊かに育ち、育てられるまち」。実効性ある子ども施策の展開に向け、小野克典市長、保育所運営大手・社会福祉法人どろんこ会「メリー★ポピンズ 桶川ルーム」の千葉彩華施設長、桶川市子ども会育成連絡協議会の湯浅哲朗会長、川田谷子育てサロンMama．Fの齋藤いおり代表が語り合った。

（司会は埼玉新聞社県北支社・荒木敏行、桶川市在住）



川田谷子育てサロン Mama.F代表
齋藤 いおり 氏
さいとう・いおり　結婚を機に桶川市に移住。出産後、子育てサークルの活動をきっかけに有志で「Mama.F」を立ち上げ、2010年から川田谷市場自治会館で本格稼働した。桶川市内に6カ所ある子育て支援拠点で唯一の市民有志による運営団体。東京都出身。58歳。



桶川市子ども会育成連絡協議会会長
湯浅 哲朗 氏
ゆあさ・てつろう　小樽商科大学入学を期に北海道に。学生時代からバンドのベーシストとして生計を立てていたが、30歳の時、子どもが生まれたのを機に保育士資格を取得し関東へ移り、保育所に勤めた。桶川市こども育成審議会委員。群馬県富岡市出身。76歳。



社会福祉法人どろんこ会
メリー★ポピンズ 桶川ルーム施設長
千葉 彩華 氏
ちば・さいか　秋草学園短期大学幼児教育学科卒業後、さいたま市内の私立幼稚園を皮切りに、北本市の保育所等で保育経験を積む。2017年「メリー★ポピンズ 桶川ルーム」の開所に携わり、20年から施設長。桶川市こども育成審議会委員。北本市出身。48歳。



桶川市長
小野 克典 氏
おの・かつのり　東海大学工学部建築学科卒。警備会社創業を経て、桶川市議（2期7年）、埼玉県議（2期6年）、2013年から桶川市長（4期目）。尊敬する人は上杉鷹山、ジョン・F・ケネディ、マーガレット・サッチャー。桶川市出身。57歳。

桶川市制55周年記念座談会

―はじめに小野市長から市制55周年を迎えての思いをお伺いします。

小野　まずは、この場をお借りしてこれまで桶川市の発展にご尽力いただきました皆さまへ感謝申し上げます。市制施行時の人口は約3万8千人。約半世紀の間に市内11地区の区画整理事業を実施し、平成27年3月にはJR高崎線の上野東京ライン、同年10月に圏央道の桶川北本インターチェンジ（IC）と桶川加納ICが開通しました。都会と田舎が交わる「とかいなか」と言える環境で、災害も少なく暮らしやすく、人口減少の中、ここ数年は転入人口が転出人口を上回る社会増が続き現在は7万4千人台となっています。

―子どもたちを取り巻く桶川市の環境について、市が取り組む子育て支援の事例をお聞かせください。

小野　私が小学生の頃は、通っていた小学校も1クラス45人で、5クラスあり、それでも教室の数が足りなくなるなどで、小学校2校が新たに開設しましたが、現在は1学年1クラスの小学校もあり、少子化は顕著です。家庭環境や価値観が変化し、行政の子育て支援ニーズも急速に変化していると感じます。桶川市では、平成29年に桶川版の「ネウボラ」（アドバイスの場を意味するフィンランド語）を立ち上げ、「母子保健コーディネーター（保健師）」「子育てコンシェルジュ（保育士）」などを配置した窓口を設置し、妊娠、出産、育児、子育て期に切れ目なく支援できる取り組みを進めています。また市内5カ所で民間の子ども食堂が運営され、各団体がネットワークを構築し、子どもの居場所や遊びの場を提供いただいています。

求められる地域支援

―どろんこ会と「メリー★ポピンズ 桶川ルーム」について教えてください。

千葉　「どろんこ会」は全国約180カ所の保育施設を運営し、児童発達支援や就労支援も行っています。新潟県南魚沼市に田んぼ、埼玉県内に畑を持ち、減農薬の給食米と野菜を生産するなど農業にも取り組んでいます。

「メリー★ポピンズ 桶川ルーム」は、JR桶川駅直結のおけがわマイン内4階にある保育園で定員は現在66人。「発達支援つむぎ 桶川ルーム」を併設し、保育園と支援の必要な子が一緒に生活する「インクルーシブ保育」を実施しています。日本では類を見ない駅前型インクルーシブ保育園です。保育園スタッフは全員保育士資格を持ち、「つむぎ」には心理士や理学療法士、作業療法士など専門職が在籍。子育て相談も行っています。保育園は地域資源の一つで、地域の子育て中のお父さんお母さんへの支援も大事な仕事と考えています。

電車で都内に通勤する方にとって駅前という好立地、そして遅くまで（20時）開園しているのも選ばれている理由です。一時保育事業では登録者数が100人を超え、利用者数も増加しています。預け先がなく困っている方や子育てに不安を抱える保護者が多いと実感しています。

―湯浅さんが子ども会に関わる中で感じる環境の変化についてお聞かせください。

湯浅　今の親世代は集団で遊ぶ経験をしていない方も多い。「サンマ（空間・時間・仲間）が消えた」と言われるように子どもを巡る環境が変化し、自然な集団遊びがほとんどありません。子ども会はそんな状況を心配した大人が作った集団です。桶川市では市制施行の年に小規模の子ども会が発足しました。今の親御さん自身、遊びの経験が少ないですが、場を設定すれば一緒に遊びたいという方は増えています。

―子ども会の担い手側の課題は。

湯浅　子ども会の意味を訴え続けていくしかありません。活動主体は子どもです。子ども同士が話し合い、準備、実行までを含め自立して動ける集団を作りたい。本来は子どもたちが活動する中で「生きる力」を身につけ、子ども同士で関わる力、大人と関わる力を育てることが子ども会の趣旨です。

仲間をどう作るか課題

―「子育てサロン」を運営する中で保護者からどんな声が届きますか。

齋藤　「アットホーム」という声が一番多いです。私自身が子育て中に孤立して不安だった時期があり、そんな時に親子で遊べる場所があると知って通い始めました。そこで子育ての仲間に出会え、気持ちに余裕が持てるようになりました。この経験から、子育てには〝安心できる居場所〟が必要だと強く感じ、サロンの活動を始めました。そのため、利用者からのこのような声はとても励みになっています。

近年では、保育園に入園される家庭が増え、利用者の中心も0歳・1歳のお子さんへと変化しています。育休中の方も多く、保育園選びや職場との手続きに時間を取られ、忙しい子育てをされている様子が伺えます。そのため一緒に遊んだり、悩みや不安を相談し合える親同士の繋がりや、交流が以前より少なくなったように感じます。子育ては、人とのつながりがとても大切です。自然豊かな環境で、季節行事を通じて親子がつながり、笑顔溢れる安心の場でありたいと思っています。

―小野市長、湯浅さんと齋藤さんのお話を聞いていかがですか。

小野　私が子どもの頃は子ども会の活動が活発で、ほぼ全ての子どもが参加していました。湯浅さんの言葉で印象に残ったのは「関わる力」です。子ども会活動は、学年が違う子ども同士や大人と一緒に活動することで、まさに人と関わる力が育まれる非常に貴重な活動であり、大人になって自分が子育てする立場になった時、様々な人達との関わりの中で、安心して子育てすることにもつながると思います。

齋藤さんからは現場の声を聞かせていただき、このような場所が必要だとあらためて感じました。昔は家族ぐるみの付き合いの中で子育ての悩みも自然と共有できましたが核家族化が進む昨今、身近に不安を共有し理解し合える場所が少なくなっています。齋藤さんのサロンのようなアットホームな空間で共に子育ての悩みや不安を共有、理解し合える場は、とても貴重です。行政としても民間と連携して、必要な時に適切な場所につなげる体制を強化できればと思います。



JR桶川駅直結のおけがわマイン4階にある「メリー★ポピンズ 桶川ルーム」は、広い屋上園庭があり地域にも開放

個々に適切な保育を

―さきほど話に出た、「インクルーシブ保育」の必要性について千葉さんにお聞きします。

千葉　日本の障害児保育・教育は、健常児と「分ける」ことを前提にしてきました。しかし必要以上に守られ、分けられることは障害児の生きる力を育む機会を奪い、自立が難しい状況を作り出します。自立し、共に頼り合って生きていくために思いを伝える力、気持ちに折り合いをつける力を身につける必要がある。桶川市でもインクルーシブ施設を作る計画があるとうかがっています。障害の有無に関わらず、一人ひとりに応じた支援を行うことこそが保育の本質という考えを生かし、ぜひ協力しながら進めていければと思います。

―子どもの数は減少しているものの、保育所や放課後児童クラブのニーズは非常に高まっています。

小野　市ではこの12年間で保育所の定員数を約1・5倍、放課後児童クラブについては約2倍に拡大しました。また、放課後児童クラブでは、父母会との連携により、新たに「お弁当の配達サービス」を開始しました。保護者の皆さまの子育て支援の一助になればと考えています。また「ロングスプーン協会」と連携協定を結び、登録飲食店でお客さんが300円でリボンを購入し、店内の掲示板に貼っておくと、そのリボンを子どもが持っていくことによって食事ができるフードリボン事業を開始しました。子ども食堂と同様に、子どもたちが安心して食事ができる場所を提供する取り組みです。



川田谷市場自治会館で開催された川田谷子育てサロンのハロウィーンイベントの様子。桶川市以外の在住の人も利用できる

―齋藤さん、今後の10年、20年で目指す姿は。

齋藤　これからも気楽に来て何でも話せるアットホームなサロンを目指していきたいです。来ていただいた際には、日常すべての場面で親子が心の余裕を持ち、安心して子育てができるように、誰一人取り残すことなく、きめ細やかな支援を行いたいと思います。しかし、川田谷子育てサロンは駅から離れているため、交通の便が難しいことが課題です。バスの本数を増やすなど何らかの対策をいただければと思います。また、多くの職員の方にPRの協力をいただいていますが「もっと早く知っていたら」と言う声もあり、さらなる周知の工夫が必要だと思います。

子どもはまちの未来

―子ども会の役割と次世代への引き継ぎについてお考えを。

湯浅　一つのモデルケースとして2年前、西小学校区に「西小子ども会」を立ち上げました。既存の子ども会が消え、最後に残った下日出谷子ども会の運営委員と連絡協メンバーが話し合い、新しい形の子ども会を作ろうとしたのです。特徴は子ども主体で、親は入らなくてもいいこと。手を挙げた親だけで運営します。2年間続けて参加者も増え、活発に活動していますよ。地域で子どもを媒介とする「縁」を作り、共に育てる形ができれば、子どもにとって居場所になると思います。

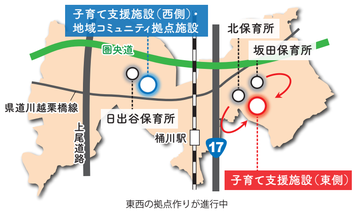
―最後に小野市長に桶川市の子育て施策の今後の展望をお聞きします。

小野　子育て施策をさらに充実させるため、東側及び西側に子育て拠点施設の整備を現在進めています。

東側の末広地区にある旧勤労青少年ホーム跡地には、北保育所と坂田保育所を統合した新たな保育所と子育て支援センターを設置します。千葉さんが既に取り組まれている「インクルーシブ保育」も含めた子育て支援施設として整備を進めます。

西側には、日出谷保育所に隣接する旧市役所分庁舎跡地に、皆さんが集えるコミュニティセンターや児童館など子育て支援機能を持たせた公共施設の整備を計画しています。いずれも4年後の令和11年度からの開設を目指し、現在事業を進めています。

最後になりますが、子どもたちは未来の桶川に欠かすことのできない宝であり、まちの未来そのものです。激変する子育てニーズをはじめとする社会ニーズに的確かつスピード感をもって対応し、常に新たな取り組みにも果敢にチャレンジし続けたいと思います。引き続き、子どもたちが夢と希望を持って未来に羽ばたけるまちづくりにまい進してまいります。



東西の拠点作りが進行中



座談会を終え記念撮影に応じる（左から）湯浅氏、千葉氏、小野市長、齋藤氏。児童は日出谷保育所の年長組の皆さん（相澤利一撮影）

「道の駅べに花の郷おけがわ」3月27日オープン



市制施行55周年の節目の年に「道の駅べに花の郷おけがわ」がグランドオープンした。開業から約6カ月で85万人を突破するなど順調な運営が続いている。

運営等を手掛けるのは「株式会社ベニネクスト」。静岡県熱海市に本社を置く、道の駅運営大手「TTC」のグループ企業でDBO方式（施設設計・建設から維持管理・運営までをワンストップで民間事業者へ発注）で整備・運営されている。

強みは上尾道路に面しているのに加え、ETC2・0搭載車で圏央道・桶川北本ICをいったん出て「道の駅べに花の郷おけがわ」に立ち寄り、2時間以内に同ICへ順方向で乗り直す場合、高速料金が据え置きとなる点。

また、埼玉県内では初の「防災道の駅」にも選定され大規模災害の際には広域的な防災拠点としての役割が期待されている。


道の駅べに花の郷おけがわ
温もり宿る桶川で、食と人を繋ぐ
祝・桶川市市制施行55周年　年末年始も休まず営業！　イベント盛りだくさんでお待ちしています
アクセス　圏央道桶川北本ICから1分　埼玉県桶川市川田谷4324-1


桶川市から『本』を全国にお届けします
～祝・桶川市市制施行55周年～
おかげさまでトーハン桶川センターも世界最大級の出版物流センターとして開設し、今年で20年を迎えます。わたくしどもはこれからも桶川市から日本中の読者に本をお届けし、豊かな社会の創造に貢献してまいります。
トーハン桶川センター　桶川市上日出谷1202-1
株式会社トーハンロジテックス　株式会社ダイエーコムネット
株式会社コバヤシユニオン　株式会社ビーカム　ロジコムコーポレーション株式会社
ウコー産業株式会社　株式会社BBロジスティクス　株式会社ブックライナー


桶川市市制施行55周年おめでとうございます
マルキユーはつれるエサづくりで応援します
MARUKYU
㊉マルキユー株式会社
〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4 TEL.048-728-0909
https://www.marukyu.com/

桶川市市制施行55周年おめでとうございます
あなたはどんなときに外食しますか？
お祝いのとき
家族の行事のとき
ご飯を作るのが面倒なとき
特別な時も、日常も、人の心を豊かにしてくれるのが「食」
外食産業には、人々の生活に彩りを与え、豊かにしていく力があります。
あなたのそばにある飲食店を、守り、育て、人生をより豊かに。
関東食糧は 食空間創造企業として外食産業を応援しています。
あなたの近くの飲食店で、食事をしませんか？

55周年の感謝とともに、食で笑顔を紡ぐ
KANTO55th
KANTO
食空間創造企業
関東食糧株式会社
あ、外食いこ♪
関東食糧HP
代表取締役社長　臼田 真一朗
〒363-0027 埼玉県桶川市大字川田谷2459-1　tel. 048-786-9111（代表）